Tsukuba Psychological Research
1996, **18**, 147-155

発話傾向尺度の作成及び信頼性と妥当性の検討
―社会的発話傾向に注目して―

筑波大学大学院(博)心理学研究科　岩男　征樹
筑波大学心理学系　堀　　洋道

Examination of validity of the speech tendency scale

Seiki Iwao and Hiromichi Hori *(Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305, Japan)*

The purpose of this study is to construct and examine the validity of scale of speech tendency. This study particularly examines the validity of the "social" speech tendency scale. In order to measure the validity of the social speech tendency scale, we use the scale of shyness as a trait, the scale of motivation for acquiring praise and motivation for avoiding rejection, the self-recognition need scale, the self-consciousness scale, and the self-esteem scale. The results indicate positive relationships between the social speech tendency scale and the scale of motivation for acquiring praise, the self-recognition need scale, and the self-esteem scale. On the other hand, the social speech tendency scale negatively correlates with the shyness as a trait scale. No significant correlation is found between the social speech tendency scale and the scale of motivation for avoiding rejection, and the public self-consciousness scale. The findings demonstrate the construct validity of the social speech tendency scale.
Key words: speech tendency scale, social speech, scale validity, scale reliability.

問　題

発話には，対人場面でコミュニケーションのために発せられる"社会的発話(social speech)"と，主に1人場面で思考や問題解決のために発せられる"私的発話(private speech)"がある．発話に関する先行研究としては，"言語的コミュニケーション"(大坊，1977ほか)，"会話"(桑原・西田・浦・榧野，1989；仲，1990ほか)，"間接的発話行為"(池田，1991，1994a，1994bほか)，"私的発話"(Diaz & Berk，1992；藤岡，1995ほか)などの研究があるが，それらの研究の主な目的は，発話が実際にどのように生じているのか，発話の内的メカニズムはどのようなものかといった点や，理論の検証にあるといえる(岩男，1995)．

これに対して，岩男(1995)は，日常で観察される"発話の個人差"に注目している．発話の個人差とは，個人がどの程度発話しがちかという行動傾向の違いのことである．岩男(1995)は，それを"発話傾向"と呼んで，日常ではそれによって活動のあり方に何らかの違いがあるのではないかと問題を提起している．例えば，"特に初対面の場合など，よく発話する人としない人を会話の相手にするのでは，そこでなされる会話の具体的な展開が異なることは明らかである．それと同時に，初対面では発話の個人差によって相手に与える対人印象が大きく異なることも考えられよう．さらには，よく発話する人としない人では，友達の多さや親密さなど，対人関係のあり方にも違いがあることが十分予想できる．それに伴って，ある他者との対人関係において何らかの問題が生じた時に，人に相談するかどうかなど問題解決の方略が異なっていることも考えられる"(岩

男，1995，p.221)．岩男(1995)は，“社会的発話傾向”と“私的発話傾向”の両方を想定した上で，それらの組み合わせによって個人を分類すれば，それぞれのタイプごとに活動の違いを明らかにすることができるとし，このことにより，従来の発話研究とは異なった視点から，新たな知見を提出することができるとしている．

岩男(1995)は，２つの発話傾向を測定する24項目からなる質問紙を作成し，230名に調査を実施した．回答に不備のあったデータを削除した後，225名のデータに対して，因子分析(主因子法，ヴァリマックス回転)を行い，社会的発話傾向と私的発話傾向の２因子を確認した．さらに，２因子の因子得点を各調査対象者ごとに算出し，それを標準化データ・マトリクスとしたクラスター分析(Ward法)を行っている．その結果，いくつかのタイプを階層的に得ている．すなわち，上位のレベルでは，“高発話型”と“低発話型”の２つのタイプ，下位のレベルでは，“低社会的発話・高私的発話型”，“全般的高発話型”，“高社会的発話・低私的発話型”，“全般的低発話型”の４つのタイプである．

今後は，これらのタイプの特徴を明らかにすることにより，発話傾向による活動の違いを明らかにしていくという研究の方向性があげられる．その際，様々な変数との関連を検討することになるだろう．それ故，社会的発話傾向，私的発話傾向を測定できる信頼性，妥当性の高い尺度を構成しておくことが必要かつ有効と考えられる．よって，本研究では発話傾向尺度の作成と信頼性，妥当性の検討を目的とする．

ただし，岩男(1995)で用いられた24項目をそのまま尺度とするには，いくつかの問題がある．第１に，因子分析の結果を見ると，項目の作成時には私的発話傾向を測定するものとして想定されていた項目が，分析後では社会的発話傾向因子に負荷してしまっている(No.10，15，16，19)．第２に，共通性が低い項目が比較的多い(特に，No.18，20，21，22)．第３に，２因子の累積寄与率が37.3％とやや低い．これらのことは，２因子を推定するにはまだ曖昧な内容を持つ項目が多少混在していることを意味していると思われる．したがって，項目の内容をもっと各発話の特徴を明確に反映するようにして，２因子のそれぞれに負荷する項目群をよりまとまりを持つようにすれば，これらの問題は改善できると思われる．また，項目の再吟味は，尺度作成の点からも必要だろう．よって，本研究は，項目のワーディングから再吟味した上で，尺度作成を試みることにする．

今回は，特に妥当性の検討を社会的発話傾向尺度に限定した．それは，以下の理由によるものである．まず調査実施の際の調査対象者の負担と回答時間の長さを考えて，質問紙における全項目数を多くても100個前後に止めておきたかった．確かに，社会的発話傾向，私的発話傾向のそれぞれについて，いくつかの尺度を収集した上で，一度に両発話傾向の妥当性を検討することも可能である．しかし，それでは，項目数の制限を設けた以上，発話傾向ごとに収集する尺度が少なくならざるを得ない．そうすると，多くの指標に妥当性の検討を訴えることができなくなる．そこで，今回は社会的発話傾向に限定して，それについてより多くの尺度を収集することにした．

この点で，本研究はまだ尺度作成，特に妥当性の検討の途中段階である．それ故，個人の分類の再検討や各タイプの特徴の明確化については，尺度がある程度信頼できるようになった段階で，改めて行うほうが適切であろう．

方　法

1　調査対象者

関東圏内の４年制大学の男女学生95名(男性46名，女性49名)と，短期大学の女子学生156名の計251名(男性46名，女性205名)．ただし，記入漏れのあったデータを削除したため，有効回答数は225名(男性44名，女性181名)であった．

2　実施期日

1993年９月下旬，10月上旬．

3　測定尺度

(1) 発話傾向尺度

項目を再吟味する際，社会的発話傾向は，“人と話をするときに”発話しがちかどうか，私的発話傾向は，“１人でいる時に”“考えごとを”発話しがちかどうかという点を明確にするように注意を払った．項目の改良の方針は以下の通りである．

①岩男(1995)の24項目については，次の３点から文章の内容を変更した．第１に，どちらの発話傾向か明確ではない項目は，いずれの発話傾向を意味する項目なのか分かるように，“人に話しているときに”とか，“１人でいる時に”といった文章を付け加えた(No.12(9)，13(10)，27(21)．カッコ内は岩男(1995)の項目番号)．第２に，“感情をすぐ口に出すほうである”(No.19)のように，社会的発話としても私的発話としても生じそうなものについては，それぞれの発話の場面を限定するような文章を付け

加えて2項目に分けた(No.16をNo.21とNo.31に，No.19をNo.25とNo.32に)．第3に，内容は変わらないようにして，表現だけ変えたものがある(No.11(8)，23(17))．残りの17項目はそのままにし，結果として計26項目となった．

②岩男(1995)の因子分析の結果を見ると，私的発話傾向因子に高い負荷を示した項目が社会的発話傾向因子に比べて少なかったので，私的発話傾向に関する項目をさらに付け加えた(No.2，4，10，15，18，22)．それは，なるべく社会的発話傾向尺度，私的発話傾向尺度とも，最終的には10項目前後になるようにしたかったからである．その結果，6項目を新たに付け加えた．

以上により，発話傾向尺度のための項目として，全体で32項目を新たに用意した．内訳は，社会的発話傾向に関するものが12項目，私的発話傾向に関するものが20項目である．②の作業の結果，私的発話傾向に関する項目のほうが，若干多くなっている．

(2) その他の尺度

対人場面での低発話傾向と関連があると考えられるものに，シャイネスや対人不安などがあげられる．シャイネスや対人不安の定義は，研究者によって様々であるが，少なくとも日常的イメージからは，それらの行動特徴の1つとして，対人場面であまり発話しない傾向を見ることは可能であろう．さらに，シャイネスや対人不安に関しては，これまで公的自己意識や自尊心との関連が指摘されている(相川，1991；Buss, 1986；黒沢，1992；Zimbardo, 1977など)．以上の点を踏まえて，ある程度，信頼性と妥当性の検討がなされている既存の尺度から，以下の5つを収集した．

①特性シャイネス尺度　本研究では，相川(1991)によって作成された日本語版のシャイネス尺度を用いる．相川(1991)は，シャイネスに関連したいくつかの尺度の中から選択基準を設けて36項目を選択し，項目分析の結果，単一次元を示す16項目を得た．これをもとに尺度を構成し，信頼性，妥当性の検討を行ったところ，十分に高いことが示されている．概念的には，“社会的不安という情動状態と対人的抑制という行動特徴を持つ”(相川，1991，p.150)とされている．項目レベルにおいても，“私は誰とでもよく話す”“私は自分から話し始める方である”(いずれも逆転項目)など，発話傾向に関するものが含まれている．よって，これに関連して，低発話傾向が想定できる．すなわち，社会的発話傾向とは負の相関を持つことが予想される．

②賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度　賞賛獲得欲求とは，他者から賞賛され，好かれたいという欲求であり，拒否回避欲求とは，他者から嘲笑されたり，拒否されたくないという欲求のことである．菅原(1986)は，従来まで承認欲求という概念で考えられてきたものは，実はこれら2つの別々な欲求から成るものであることを指摘している．菅原(1986)は，賞賛獲得欲求や拒否回避欲求が高い人は，自分が他者に対して如何に振る舞っているかということについて，一体どのようなイメージを持っているのかという点を明らかにするために検討を行っている．その結果，賞賛獲得欲求は，“おしゃれ，見えっ張り，人気のある，洗練された，自意識過剰，おしゃべり，ゆかい，お調子者，プライドある，ひょうきん”といった“自己顕示者イメージ”と関連があり，拒否回避欲求は，“気が弱い，引っ込み思案，人の良い，八方美人，気づかいの多い，照れ屋，愛想の良い”といった“善良な市民イメージ”と関連があることが明らかになった．ここで，賞賛獲得欲求と関連を持つ“自己顕示的イメージ”の中身を見ると，“おしゃべり”，“ゆかい”，“お調子者”，“ひょうきん”など，高発話傾向と関連のあるイメージが散見されることが分かる．よって，社会的発話傾向は賞賛獲得欲求とは正の相関を持つことが予想される．一方，拒否回避欲求と関連を持つ“善良な市民イメージ”の中身を見ると，“引っ込み思案”といったシャイネスや低発話傾向に関する側面は見られるが，一方で“八方美人”や“気づかいの多い”など，全く正反対の側面も見られる．したがって，全体のイメージとしてみると，必ずしもこれが直接的にシャイネスや発話傾向と関連を持っているとはいえないと思われる．すなわち，拒否回避欲求は社会的発話傾向とは無相関になることが予想される．本研究では，菅原(1986)の賞賛獲得欲求尺度5項目，拒否回避欲求尺度4項目の計9項目を用いた．

③自己認識欲求測定尺度　自己認識欲求とは，自己を認識したいと思う欲求のことであり，自己に関する情報収集行動を生起させるものである．また，自己を認識するとは，自分自身に対する知識としての自己概念を明確にすることであり，結果として自己が今後どのように行動したらよいのかを明らかにすることにもつながるものである(上瀬，1992)．上瀬(1992)は，自己認識欲求に関する項目を作成し，因子分析の結果をもとにして，自己認識欲求尺度とネガティブ情報回避欲求尺度を構成した．自己認識欲求が喚起されると，能力の評価などに限らず，自己の様々な側面について様々な手段を用いて情報収集することが明らかにされている．その際，シンボリック相互作用論の指摘もあるように，自己概念の形成や獲得に関しては，他者とのコミュニケーショ

ンが基本的かつ最も有効であると考えられよう．自己の明確化に関しても，同様である．しかも，そこにおいては，特にコトバの役割が大きいと思われる．言い換えれば，他者との関わりの中で，コトバを用いて，それを通じて自己に関する情報を直接的あるいは間接的に収集するということである．当然，その手段を使用すればするほど，情報収集する可能性は高くなる．あるいは，自己認識欲求の高い人は，コトバを通じて他者と多く関わりを持つことによって，常に自己を維持しているのかも知れない．これらの点から，自己認識欲求が高い人は，発話傾向も高いことが考えられる．すなわち，自己認識欲求は社会的発話傾向と正の相関を持つことが予想される．本研究では，上瀬(1994)で紹介された自己認識欲求測定尺度の下位尺度である，自己認識欲求尺度14項目とネガティブ情報回避欲求尺度7項目の計21項目を用いた．

④自己意識尺度　従来シャイネスと公的自己意識の間には関連があることが指摘されてきた(相川，1991；Buss, 1986；Zimbardo, 1977)．実際，シャイネスと公的自己意識の間には正の相関があることが示されている(Cheek & Buss, 1981)．しかしながら，本邦においては，この点については，あまり明確ではない．例えば，相川(1991)では，5％水準で統計的には有意であったものの，.081とほとんど無相関の結果を得ており，今井・押見(1987)でも，.16と無相関に近い結果を得ている．よって，本研究でも，シャイネスと公的自己意識は無相関になることが考えられる．このことから，特性シャイネスと関連が深いと考えられる発話傾向も，公的自己意識とは無相関になることが予想される．本研究では，公的自己意識，私的自己意識については，Fenigstein, et al.(1975)の原版を押見他(1985)，菅原(1984)の尺度を参考にして再翻訳し，さらに独自の項目を追加して，新たに尺度を構成した，黒沢(1992)の自己意識尺度を用いた．下位尺度の内訳は，公的自己意識10項目，私的自己意識10項目の計20項目である．

⑤自尊心尺度　これまでシャイネスと自尊心の間には負の相関があることが示されている(相川，1991；Cheek & Buss, 1981)．よって，シャイネスと関連が深い発話傾向は，自尊心とも関連を持つことが考えられる．すなわち，社会的発話傾向と自尊心の間には正の相関があることが予想される．本研究では，Rosenberg (1965)の自尊心尺度の邦訳版(山本他，1982)の10項目を用いた．

4　質問紙の構成

質問紙は，性別，年齢など調査対象者の基本的属性を尋ねる質問と，上で述べた6つの尺度で構成した．質問紙における各尺度の順番は，発話傾向尺度に続いて，上で述べた①～⑤の順であった．以上の尺度のうち，賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度，自己認識欲求測定尺度(自己認識欲求，ネガティブ情報回避欲求)，自己意識尺度(公的自己意識，私的自己意識)については，各下位尺度がかたまらないように質問項目を配置した．質問紙自体は無記名であったが，学生の授業の出席をとる必要から，質問紙とは別に出席カードを配布し，記名させた．調査対象者には，自己認識欲求測定尺度を除く全ての尺度項目について，自分に“あてはまる”から“あてはまらない”までの5件法で評定させた．自己認識欲求測定尺度については，“一致している”から“一致していない”までの5件法で評定させた．

5　手続

調査は，4年制大学(9月下旬)と短期大学(10月上旬)で，心理学の授業の一部を利用して，集団形式で行った．

結果と考察

1　発話傾向尺度の作成と信頼性の検討

発話傾向に関する32項目については，“あてはまる”を5点，“あてはまらない”を1点，逆転項目はその反対に得点化し，全ての項目で得点が高いほど発話傾向を意味するようにした．

32項目の項目分布(N＝225)を見たところ，著しい偏りがあるものがなかったので，以下の分析はこの32項目に対して行った．

各項目の男女別及び全体の平均値と標準偏差をTable 1に示した．t検定の結果，男女間に有意差が見られた項目は，No.2, 4, 25, 32($p<.05$)であった．若干の項目で男女差が得られたが，男女の人数にかなりの偏りがあるので，この点については再検討する必要がある．同様に，因子分析についても男女別の分析にはやや難があるが，一応確認のために，最初に男女別に因子分析を行ってみた．その結果，因子構造がほとんど同じだったので，以下の分析は全て男女を込みにして行うことにした．

225名全体のデータに対して主因子法による因子分析を行ったところ，固有値の推移は，7.29, 4.68, 1.93, 1.59, 1.31…となった．そこで，2因子を抽出して，ヴァリマックス回転を行った．2因子までの累積寄与率は，37％である．その結果，第Ⅰ因子には，“よく独り言を言っている”(No.17)，“1人でいる時，思いついたことを口にしていることが

Table 1　発話傾向に関する項目の平均値と標準偏差

項　　目	男	女	差	全体
1．人と話をしていて，思いついたことはすぐ口にするほうである．(S)	3.37(1.21)	3.65(1.00)		3.60(1.04)
2．何かに困って解決法を1人で考えるときに，声に出していることがよくある．(P)	3.14(1.32)	2.57(1.30)	*	2.68(1.32)
*3．言いたいことが，なかなか思うように口で表現できない．(S)	2.73(1.23)	2.71(1.10)		2.72(1.12)
*4．1人で部屋にいるときは，あまり声を出さないほうである．(P)	3.00(1.36)	2.50(1.31)	*	2.60(1.33)
5．「よくしゃべるね」と人に言われる．(S)	2.80(1.39)	3.15(1.21)	+	3.08(1.26)
*6．声を出さずに，考えをまとめることができる．(P)	2.05(0.96)	2.39(1.13)	+	2.32(1.11)
7．1人でいる時，思いついたことを口にしていることが多い．(P)	2.86(1.32)	2.64(1.27)		2.68(1.28)
8．独り言をつい人に聞こえるくらいの声で言ってしまう．(P)	2.50(1.39)	2.15(1.30)		2.22(1.32)
9．「静かにしろ」と言われることがある．(S)	2.18(1.11)	2.59(1.32)	+	2.51(1.29)
10．1人で勉強している時，考えていることをよく声に出している．(P)	2.86(1.30)	2.65(1.34)		2.69(1.34)
*11．会話では相手の話を聞いていることのほうが多い．(S)	2.48(1.02)	2.75(0.97)		2.69(0.98)
12．人と話をするときには，しゃべらずにはいられない．(S)	3.20(1.13)	3.38(1.00)		3.35(1.03)
*13．人と話をするときは，考えてからものを言うほうである．(S)	2.77(1.24)	2.72(1.06)		2.73(1.09)
14．本を読んでいて，思わず文章を声に出して読むことがある．(P)	1.77(1.08)	2.14(1.27)	+	2.07(1.24)
*15．一生懸命に考えるときは，黙っていることのほうが多い．(P)	1.98(1.11)	1.91(1.05)		1.92(1.06)
*16．人と話すとき，黙りがちになる．(S)	3.48(0.98)	3.69(0.98)		3.64(0.98)
17．よく独り言を言っている．(P)	2.50(1.30)	2.10(1.20)	+	2.18(1.23)
18．声を出さずに黙ったままで考えていると，うまく頭の整理が出来ない．(P)	2.00(1.06)	2.20(1.13)		2.16(1.11)
*19．「おとなしいね」と人に言われる．(S)	3.11(1.06)	3.48(1.22)	+	3.41(1.20)
20．考えていることをそのまま口にしていることが多い．(S)	2.84(1.24)	2.85(1.09)		2.84(1.12)
*21．人と話をしているときに，心の中でつぶやいていることが多い．(P)	2.86(1.17)	3.10(1.18)		3.06(1.18)
*22．何かを考えるときに声を出すということはほとんどない．(P)	2.89(1.22)	2.79(1.17)		2.81(1.18)
23．会話では話していることのほうが多い．(S)	2.86(1.09)	3.11(0.92)		3.06(0.96)
*24．自分の声をよそよそしく感じることがある．(P)	3.36(1.28)	3.32(1.19)		3.33(1.21)
25．会話の中で感情をすぐ口に出すほうである．(S)	2.84(1.29)	3.34(1.14)	*	3.24(1.18)
*26．「何を考えているかわからない」とよく人に言われる．(P)	2.98(1.36)	3.03(1.31)		3.02(1.32)
27．1人でしゃべりながら考えていることが多い．(P)	2.45(1.30)	2.14(1.16)		2.20(1.19)
*28．自分だけで考えたほうが，考えが進む．(P)	2.70(1.11)	2.98(1.12)		2.93(1.12)
29．奇声をあげることが多い．(P)	2.45(1.45)	2.26(1.33)		2.30(1.36)
*30．口に出して考えるより頭の中で考えるほうが楽である．(P)	2.55(1.13)	2.48(1.04)		2.49(1.05)
*31．1人でいる時に，心の中でことばをつぶやいていることが多い．(P)	2.32(1.18)	2.65(1.20)	+	2.59(1.20)
32．1人でいる時，感情を口にすることが多い．(P)	2.64(1.28)	2.20(1.18)	*	2.28(1.21)

※　*印は逆転項目．文末の(S)，(P)はそれぞれ社会的発話傾向，私的発話傾向を測定すると考えられた項目である．有効回答数は男性がN＝44，女性がN＝181，全体ではN＝225であった．
また，カッコ内は標準偏差，男女差の検定結果の意味は次の通りである．＋…$.05<p<.10$　*…$p<.05$

多い”(No.7)，“独り言をつい人に聞こえるくらいの声で言ってしまう”(No.8)などの項目の因子負荷量が高く，この因子は“私的発話傾向”因子であると解釈することができる．第Ⅱ因子には，“会話では話していることのほうが多い”(No.23)，“「よくしゃべるね」と人に言われる”(No.5)，“会話では相手の話を聞いていることのほうが多い”(No.11)などの項目の因子負荷量が高く，この因子は“社会的発話傾向”因子であると解釈することができる．これらの結果から，岩男(1995)と同じ2因子が抽出できたといえる．ただし，岩男(1995)とは異なり，本研究では私的発話傾向因子のほうが第Ⅰ因子として抽出された．その理由としては，私的発話傾向に関する項目のほうが多かったこと，それらの項目が32項目全体の中で相対的にまとまりのある内容であったこと，などがあげられる．いずれにせよ，この点での岩男(1995)の結果との違いは，本質的な問題ではないと思われる．

尺度を構成するにあたり，基本的にはこれら2因子に高い負荷を示した項目の中から尺度項目を選ぶことにした．本研究では，よりそれぞれの因子を構成するのにまとまりのある項目を選ぶために，因子負荷量の高い項目を選び出し，さらに因子分析を繰り返すことによって，項目を選別していくことにした．通常，因子負荷量の高い項目を選ぶ基準としては.40というのが多いが，本研究ではやや厳しく基準を置き，.50以上のものを選ぶようにした．

そこで，次に上の因子分析の結果から.50以上の負荷を示した項目を選び出し，同様の因子分析(主因子法，ヴァリマックス回転)を行った．選ばれた項目は，負荷量の高かった順に，私的発話傾向因子については，No.17，7，8，4，22，2，27，10，32，18，30，6，29の13項目，社会的発話傾向因子については，No.23，5，11，12，19，16，1，9，25の9項目の計22項目であった．この22項目に対する因子分析の結果，最初の因子分析と同じ2因子が抽出された．2因子までの累積寄与率は，48.7%となった．

さらに項目を洗練するために，2回目の因子分析の結果から，.50以上の負荷を示した項目を選び出し，それらについて因子分析(主因子法，ヴァリマックス回転)を行った．選ばれた項目は，上述のNo.29以外の21項目であった．この21項目に対する因子分析の結果，同じく2因子が抽出され，全ての項目がそれぞれの因子に.50以上の負荷を示すようになった．この時点で，2因子までの累積寄与率は50.0%となった．最終的な因子分析の結果をTable 2に示した．

以上の結果をもとに，社会的発話傾向尺度を9項目，私的発話傾向尺度を12項目から構成することにした．3回にわたる因子分析を行ったことで，それぞれの尺度にはかなり一次元性の高い項目が選ばれていると考えることができる．この点を確認するために，それぞれの尺度項目に対して，主成分分析を行った．その結果，社会的発話傾向尺度の9項目は.55～.83，私的発話傾向尺度の12項目は.53～.82と，いずれも第1主成分に対して高い負荷を示した．同様に，それぞれの尺度項目に対して，I-T相関分析を行ったところ，社会的発話傾向尺度の項目は.59～.81，私的発話傾向尺度の項目は.55～.81と十分な結果を示した．これらの結果から，いずれの尺度についても，かなりまとまりのある項目を選ぶことができたといえる．

ここで，尺度の信頼性を検討するために，それぞれの尺度のα係数を算出した．その結果，社会的発話傾向尺度は.87，私的発話傾向尺度は.90であった．

Table 2　発話傾向に関する項目の最終的な因子分析の結果

項目番号	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	共通性
17	.82		.68
7	.80		.65
8	.78		.61
4	.73		.53
22	.71		.52
2	.70		.51
10	.68		.46
32	.67		.45
27	.65		.43
18	.64		.41
30	.56		.32
6	.53		.29
23		.83	.69
5		.80	.67
12		.77	.59
11		.75	.56
19		.71	.51
16		.66	.45
1		.65	.42
9		.64	.47
25		.55	.31
寄与率	30.1%	19.9%	

このことから，いずれの尺度の信頼性も，十分に高いことが示されたといえる．

また，各尺度の合成得点を算出し，男女差を検討してみた．私的発話傾向には差がないが，社会的発話傾向は女性のほうが高いという結果が得られた(Table 3)．この結果は，岩男(1995)においても，各項目の男女差の検討で同様に見られたものである．しかしながら，本研究では，男女の人数に著しい偏りがあるため，明確な結論を出すことはできない．尺度の検討とともに，今後の課題といえる．

2　他の尺度の検討

本研究では，5つの尺度については，以下の検討を行った．まずそれぞれの尺度項目に対して，因子分析もしくは主成分分析を行い，各項目が目的の因子に高い負荷を示すかどうかを確認した．本研究では，その結果をもとに，高い負荷を示した項目によって，改めて各尺度を構成した．以後に行う相関分析は，ここで再構成された尺度を用いて行っている．

Table 3　各尺度の平均値と標準偏差

尺度名	男性(N=44)	女性(N=181)	差	全体(N=225)
社会的発話傾向	26.34(7.44)	29.13(6.82)	*	28.58(7.02)
私的発話傾向	31.43(10.99)	28.81(10.00)		29.32(10.23)
特性シャイネス	46.86(10.80)	41.57(10.46)	**	42.60(10.72)
賞賛獲得欲求	16.70(5.31)	17.14(3.95)		17.06(4.24)
拒否回避欲求	13.20(3.54)	15.06(3.30)	**	14.69(3.42)
自己認識欲求	39.55(9.51)	46.18(10.35)	**	44.88(10.50)
ネガティブ情報回避欲求	13.52(4.65)	15.15(4.09)	*	14.84(4.24)
公的自己意識	35.25(6.67)	37.18(6.63)	+	36.80(6.67)
私的自己意識	36.75(6.00)	35.67(5.94)		35.88(5.95)
自尊心	31.70(7.43)	29.30(5.94)	+	29.76(6.31)

※カッコ内は標準偏差．男女差の検定結果の意味は次の通りである．
+….05<p<.10　*…p<.05　**…p<.01

(1) 特性シャイネス尺度

特性シャイネス尺度の16項目に対して，主成分分析を行ったところ，“私は他人の前では，気が散って考えがまとまらない”の1項目を除いて，いずれも第1主成分に高い負荷を示した．残りの15項目で尺度を構成し，α係数を算出したところ，.91であった．十分に高い信頼性を示していると考えられる．

(2) 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度

9項目に対して，因子分析(主因子法，ヴァリマックス回転)を行ったところ，菅原(1986)と同様の結果が得られた．すなわち，賞賛獲得欲求因子に5項目，拒否回避欲求因子に4項目が高い負荷を示した．この結果をもとに尺度を構成した．それぞれの尺度のα係数を算出したところ，賞賛獲得欲求尺度が.85，拒否回避欲求尺度が.75であった．いずれも十分な信頼性を示している．

(3) 自己認識欲求測定尺度

自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求に関する21項目に対して，因子分析(主因子法，ヴァリマックス回転)を行ったところ，自己認識欲求因子とネガティブ情報回避欲求因子が抽出された．自己認識欲求因子には当初の14項目が負荷し，ネガティブ情報回避欲求因子には“他の人が，自分について言う事はまとはずれな事が多い”を除いた残りの6項目が負荷した．この結果をもとに尺度を構成し，α係数を算出したところ，自己認識欲求尺度は.88，ネガティブ情報回避欲求尺度は.69であった．ネガティブ情報回避欲求尺度は他に比べてやや低いものの，十分に信頼性があると判断できると思われる．

(4) 自己意識尺度

公的自己意識に関する10項目と私的自己意識に関する10項目の計20項目に対して，因子分析(主因子法，ヴァリマックス回転)を行ったところ，公的自己意識因子と私的自己意識因子が抽出された．それぞれ当初の10項目が高い負荷を示している．この結果をもとに尺度を構成し，α係数を算出したところ，公的自己意識尺度が.88，私的自己意識尺度が.79であった．いずれも高い信頼性を示していると思われる．

(5) 自尊心尺度

10項目に対して主成分分析を行ったところ，“もっと自分自身を尊敬できるようになりたい”(逆転項目)の1項目を除いた，残りの9項目が第1主成分に高い負荷を示した．この9項目で尺度を構成し，α係数を算出したところ，.84であった．これは，十分な信頼性があると思われる．

(6) 各尺度の男女差

以上で再構成された尺度をもとにして，男女差の検討を行ってみた．その結果を，Table 3に示した．男性のほうが高い傾向を示したのは，特性シャイネス(p<.01)，自尊心(.05<p<.10)，女性のほうが高い傾向を示したのは，拒否回避欲求(p<.01)，自己認識欲求(p<.01)，ネガティブ情報回避欲求(p<.05)，公的自己意識(.05<p<.10)であった．

(7) 尺度間相関

Table 4を見ると，ほぼ従来通りの結果が得られていると思われる．例えば，特性シャイネスは，自尊心とは負の相関，公的自己意識，私的自己意識とはほぼ無相関であったが，これは相川(1991)の結果と同じである．また，自己認識欲求は，ネガティブ情報回避欲求とは.15と，上瀬(1992)の.13の相関とほぼ同じである．同様に，自己認識欲求が賞賛獲得欲求，拒否回避欲求と正の相関，自尊心と無相関であったこと，ネガティブ情報回避欲求が拒否回避欲求と正の相関であったことも，上瀬(1992)の結果と同じである．これらの結果は，5つの尺度が安定した指標であることを示しているといえよう．これ以外に注目すべきなのは，特性シャイネスが賞賛獲得欲求とは正の相関があり，拒否回避欲求とは無相関であったことである．このことは，“方法”の“測定尺度”の紹介のところで述べた，賞賛獲得欲求，拒否回避欲求とシャイネス，発話傾向との関連についての考察が適切であったことを支持しているものと思われる．

3　発話傾向と他の尺度の関連

(1) 社会的発話傾向と私的発話傾向の関連

Table 4のように，社会的発話傾向と私的発話傾向は1％水準で有意ではあったものの，.18と極めて弱い相関を示した．本研究では，岩男(1995)の指摘を受けて，2つの発話傾向を独立と見なして尺度

化を行ったわけであるが，この点で満足のいく結果であったと思われる．おそらく，これらの発話傾向は，日常の活動に対しても別々の影響を持っているであろう．この点については，今後の課題である．

(2) 社会的発話傾向尺度と他尺度との関連

Table 4のように，ほぼ予想通りの結果が得られた．すなわち，社会的発話傾向は，特性シャイネスとは負の相関，賞賛獲得欲求とは正の相関，拒否回避欲求とは無相関，自己認識欲求とは正の相関，公的自己意識とは無相関，自尊心とは正の相関があった．以上の結果は，社会的発話傾向尺度の構成概念妥当性を示すものであると考えられる．また，本研究では，探索的な意味を込めて，ネガティブ情報回避欲求尺度と私的自己意識尺度を同時に用いたが，そのいずれも社会的発話傾向とは相関を持たなかった．

(3) 私的発話傾向尺度と他尺度との関連

私的発話傾向は，賞賛獲得欲求とのみ1％水準で正の相関があった．しかしながら，それは.17であることから，実質的には極めて弱い相関であるといえる．いずれにせよ，これに対して社会的発話傾向が多くの尺度との間に相関があったことを考慮すると，私的発話と社会的発話は内容的にはほぼ独立であると見なすことができるであろう．

4　今後の課題

以上の結果から，社会的発話傾向尺度の妥当性は十分に示されたといえる．今後は，行動指標との関連からさらに妥当性の検討を行う必要がある．

同様に，私的発話傾向尺度についても，妥当性の検討を行う必要があるだろう．私的発話が思考や問題解決に関連した発話であることを考えると，私的発話傾向は認知的側面に関連した個人特性と関連を持っていることが考えられる．例えば，本をどこに置いたか忘れてしまった，車を運転していて標識を見落としてしまった，などのような“認知的失敗”(山田，1990)の多い人ほど，本や標識を探そうとするための私的発話を発する機会が多くなると思われる．

それらの検討の後，岩男(1995)で明らかになった発話傾向によるタイプを再確認し，各タイプの特徴を明確にしていくことが必要であると思われる．

要　約

本研究では，岩男(1995)で用いられた発話傾向に関する項目をもとに，発話傾向尺度を作成し，その信頼性と妥当性を検討することを目的とした．本研究では，特に社会的発話傾向尺度について妥当性の検討を行った．その検討のために，特性シャイネス尺度，賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度，自己認識欲求測定尺度(自己認識欲求，ネガティブ情報回避欲求)，自己意識尺度(公的自己意識，私的自己意識)，自尊心尺度が用いられた．225名のデータに対する分析の結果，社会的発話傾向尺度と他の尺度との間に予想通りの相関が得られた．すなわち，社会的発話傾向は，特性シャイネスとは負の相関，賞賛獲得欲求とは正の相関，拒否回避欲求とは無相関，自己認識欲求とは正の相関，公的自己意識とは無相関，自尊心とは正の相関があった．以上の結果から，社会的発話傾向尺度の構成概念妥当性が示されたといえる．

Table 4　尺度間相関

	私的発話	シャイネス	賞賛獲得欲求	拒否回避欲求	自己認識欲求	ネガティブ	公的自己意識	私的自己意識	自尊心
社会的発話	0.18**	−0.53**	0.21**	0.06	0.21**	0.04	−0.02	−0.05	0.14*
私的発話		−0.04	0.17**	−0.10	0.04	0.07	0.06	0.07	−0.03
シャイネス			−0.31**	−0.10	−0.21**	0.16*	−0.04	0.03	−0.34**
賞賛獲得欲求				0.44**	0.38**	0.06	0.57**	0.11	0.21**
拒否回避欲求					0.35**	0.24**	0.51**	−0.02	−0.16*
自己認識欲求						0.15*	0.30**	0.06	−0.07
ネガティブ							−0.01	−0.23**	−0.20**
公的自己意識								0.26**	−0.08
私的自己意識									−0.02

※社会的発話：社会的発話傾向
　私的発話：私的発話傾向
　シャイネス：特性シャイネス
　ネガティブ：ネガティブ情報回避欲求

*…$p<.05$　**…$p<.01$

引用文献

相川　充　1991　特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究　心理学研究，**62**，149-155.

Buss, A.H. 1986 *Social Behavior and Personality.* Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.（バス，A.H.　大渕憲一(監訳)　1991　対人行動とパーソナリティ　北大路書房）

Ceek, J.M. & Buss, A.H. 1981 Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology,* **41**, 330-339.

大坊郁夫　1977　2人間コミュニケーションにおける言語活動性の構造　実験社会心理学研究，**17**，1-13.

Diaz, R.M. & Berk, L.E. 1992 *Private speech: From social interaction to self-regulation.* Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.

Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A.H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology,* **43**, 522-527.

藤岡久美子　1995　絵カード分類課題遂行中の幼児の独り言の分析　日本発達心理学会第6回大会，39.

池田進一　1991　間接的発話行為　教育心理学研究，**39**，228-238.

池田進一　1994a　間接的要求における形式と意味の再生過程　教育心理学研究，**42**，216-224.

池田進一　1994b　間接的要求における理解と記憶　教育心理学研究，**42**，471-480.

今井明雄・押見輝男　1987　シャイネス尺度の検討　日本社会心理学会第28回大会発表論文集，66.

岩男征樹　1995　発話傾向についての自己報告に基づく個人の分類　教育心理学研究，**43**，220-227.

上瀬由美子　1992　自己認識欲求の構造と機能に関する研究－女子青年を対象として－　心理学研究，**63**，30-37.

上瀬由美子　1994　自己認識欲求測定尺度　堀洋道・山本真理子・松井豊(編)　心理尺度ファイル　垣内出版　Pp.58-62.

黒沢　香　1992　自己意識尺度と自尊心尺度　千葉大学人文研究，**21**，79-122.

桑原尚史・西田公昭・浦　光博・榧野　潤　1989　社会的文脈における会話処理過程の検討　心理学研究，**60**，163-169.

仲真紀子　1990　会話　内田伸子(編)　新・児童心理学講座6　言語機能の発達　金子書房　Pp.149-182.

押見輝男・渡辺浪二・石川直弘　1985　自己意識尺度の検討　立教大学研究年報，**28**，1-15.

Rosenberg, M. 1965 *Society and adolescent self-image.* Princeton: Princeton University Press.

菅原健介　1984　自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み　心理学研究，**55**，184-188.

菅原健介　1986　賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求－公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について－　心理学研究，**57**，134-140.

山田尚子　1990　CFQ(Cognitive Failures Questionnaire)に関する検討(1)　甲南女子大学大学院心理学年報，**9**，1-20.

山本真理子・松井　豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，**30**，64-68.

Zimbardo, P.G. 1977 *Shyness: What it is, what to do about it.* Massachusetts: Addison-Wesley.（ジンバルドー，P.G.　木村駿・小川和彦(訳)　1982　シャイネス　勁草書房）

—1995.9.30受稿—